

資料⑤



大飯発電所 3号炉 高経年化技術評価 照射誘起型応力腐食割れ

関西電力株式会社

2021年6月15日

1. 照射誘起型応力腐食割れについて	2
2. 評価対象機器の抽出	3
3. 健全性評価	6
3.1 適用規格、評価条件	6
3.2 照射誘起型応力腐食割れの損傷予測評価	6
4. 現状保全	10
5. 総合評価	10
6. 高経年化への対応	10

1. 照射誘起型応力腐食割れについて

【照射誘起型応力腐食割れ（IASCC）とは】

オーステナイト系ステンレス鋼は、高い中性子照射量を受けると応力腐食割れの感受性が高くなることが知られている。照射誘起型応力腐食割れ（以下、IASCC）は、この状況に引張応力が作用すると粒界型応力腐食割れが生じる現象である。

IASCCの発生要因としては、材料、環境及び応力の3つの要因が考えられ、運転時間が経過し、非常に高い中性子照射量を受けたステンレス鋼において発生する可能性がある。

また、これまで得られている材料試験データから、IASCCの発生環境としては中性子照射量・環境温度・応力が高いほど厳しいことが判明している。

海外では炉内構造物の点検によってIASCCによるバッフルフォーマボルトの損傷が確認されている。例えば、米国において多数のボルト損傷が確認されているが、これらのプラントと大飯3号ではバッフル構造の相違^{※1}がある。さらに、大飯3号では耐IASCCに考慮したボルト形状^{※2}としている。

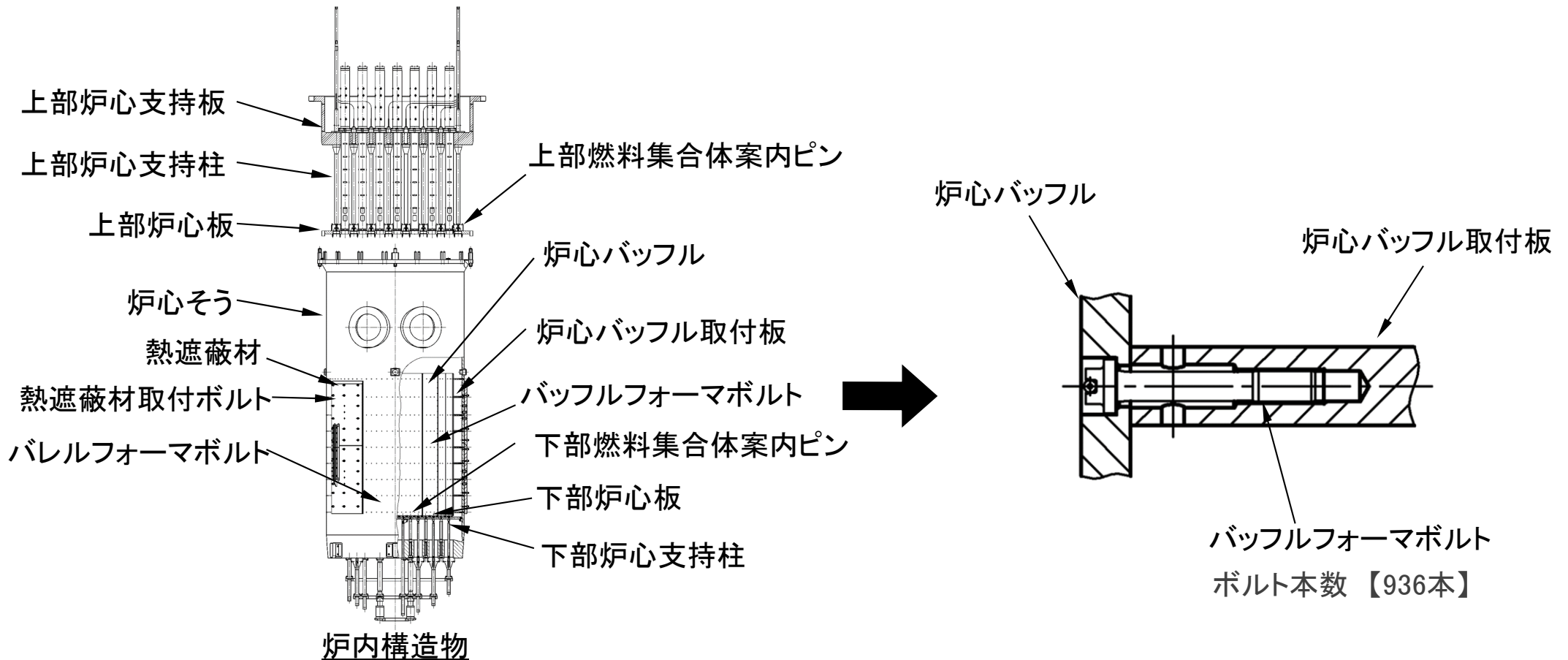
なお、日本国内ではIASCCの発生が確認された事例はない。

※1 ダウンフロー構造（炉心そうと炉心バッフルの間のバイパス流の流れが下向き）あるいは運転開始後にダウンフロー構造からアップフロー構造（バイパス流の流れが上向き）に変更したものであるのに対し、大飯3号炉は運転開始当初からアップフロー構造である。

※2 ボルトのシャンクが長く、首下の応力集中を低減させた形状により発生応力の低減を図るとともに、ベントホールを有することで温度低減が図られている構造である。

2. 評価対象機器の抽出(1/3)

- ・材料がステンレス鋼で、IASCC感受性の発生が考えられる中性子照射量 10^{21}n/cm^2 [$E > 0.1\text{MeV}$] オーダー以上(運転開始後60年時点)を受ける機器を抽出した結果、対象機器は炉内構造物のみであった。
- ・炉内構造物の各部位の中性子照射量、温度、応力レベルを次頁の表1に整理した。これらの部位のうち、中性子照射量と温度が最も高く、応力レベルも大きく、海外での損傷事例もあるバッフルフォーマボルトを最も厳しい評価部位として選定した。



2. 評価対象機器の抽出(2/3)

表1 ステンレス鋼のIASCCの可能性評価(1/2)

部位	実機条件			海外の 損傷 事例	可能性評価
	中性子照射量 レベル*1 [n/cm ² :E>0.1MeV]	応力レベル*2 (応力支配因子)	温 度 [°C]		
バッフルフォー マボルト	9 × 10 ²²	大 (締付+熱曲げ +照射スウェリング)	325	有	発生可能性有り。炉心バッフルの照射スウェリングにより応力増加が生じるため亀裂発生の可能性が大きくなる。海外損傷事例もあり最も厳しい。
炉心バッフル	9 × 10 ²²	小 (熱応力)	325	無	バッフルフォーマボルトよりも応力レベルが小さいため、バッフルフォーマボルトに比べて発生の可能性は小さい。
炉心バッフル 取付板	9 × 10 ²²	小 (熱応力)	325	無	バッフルフォーマボルトよりも応力レベルが小さいため、バッフルフォーマボルトに比べて発生の可能性は小さい。
バレルフォーマ ボルト	8 × 10 ²¹	大 (締付+熱曲げ)	325	無	応力レベルは大きいですが、バッフルフォーマボルトよりも中性子照射量が小さいため、バッフルフォーマボルトに比べて発生の可能性は小さい。
炉心そう	1 × 10 ²²	大 (溶接部) (溶接残留応力)	325	無	溶接残留応力が存在し応力レベルは大きいですが、バッフルフォーマボルトよりも中性子照射量が小さいため、バッフルフォーマボルトに比べて発生の可能性は小さい。
上部炉心板	1 × 10 ²¹	小 (熱応力)	325	無	バッフルフォーマボルトよりも中性子照射量および応力レベルが小さいため、バッフルフォーマボルトに比べて発生の可能性は小さい。

*1: 中性子照射量レベルは運転開始後60年時点での各部位の推定最大中性子照射量レベルを示す。

*2: 応力レベルは各部位の最大応力値を示す。【大: >Sy(非照射材の降伏応力) 中: ≒Sy(非照射材の降伏応力) 小: <Sy(非照射材の降伏応力)】

2. 評価対象機器の抽出(3/3)

表1 ステンレス鋼のIASCCの可能性評価(2/2)

部位	実機条件			海外の 損傷 事例	可能性評価
	中性子照射量 レベル*1 [n/cm ² :E>0.1MeV]	応力レベル*2 (応力支配因子)	温度 [°C]		
上部燃料集合体 案内ピン	1 × 10 ²¹	小 (締付け)	325	無	バッフルフォーマボルトよりも中性子照射量および応力レベルが小さいため、バッフルフォーマボルトに比べて発生の可能性は小さい。
下部燃料集合体 案内ピン	9 × 10 ²¹	小 (締付け)	289	無	バッフルフォーマボルトよりも中性子照射量、応力レベルおよび温度が小さいため、バッフルフォーマボルトに比べて発生の可能性は小さい。
下部炉心板	9 × 10 ²¹	大 (熱応力)	289	無	応力レベルは大きいですが、バッフルフォーマボルトよりも中性子照射量および温度が小さいため、バッフルフォーマボルトに比べて発生の可能性は小さい。
下部炉心支持柱	4 × 10 ²¹	中 (曲げ)	289	無	バッフルフォーマボルトよりも中性子照射量、応力レベルおよび温度が小さいため、バッフルフォーマボルトに比べて発生の可能性は小さい。
熱遮蔽材	5 × 10 ²¹	小 (熱応力)	289	無	バッフルフォーマボルトよりも中性子照射量、応力レベルおよび温度が小さいため、バッフルフォーマボルトに比べて発生の可能性は小さい。
熱遮蔽材 取付ボルト	5 × 10 ²¹	大 (締付+熱曲げ)	289	無	応力レベルは大きいですが、バッフルフォーマボルトよりも中性子照射量および温度が小さいため、バッフルフォーマボルトに比べて発生の可能性は小さい。

*1: 中性子照射量レベルは運転開始後60年時点での各部位の推定最大中性子照射量レベルを示す。

*2: 応力レベルは各部位の最大応力値を示す。【大: >Sy(非照射材の降伏応力) 中: ≒Sy(非照射材の降伏応力) 小: <Sy(非照射材の降伏応力)】

3. 健全性評価(1/4)

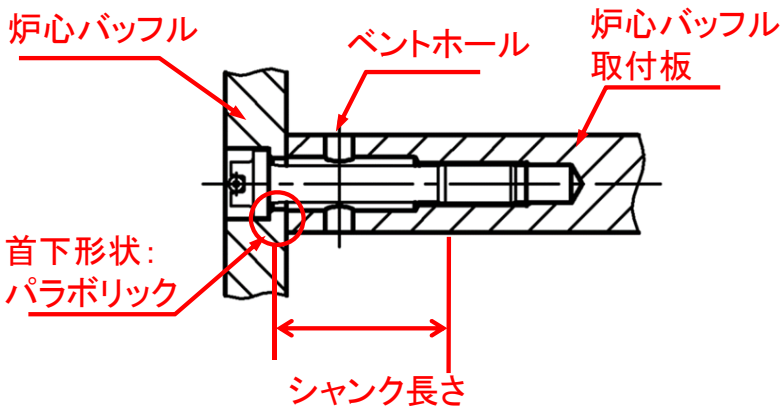
3.1 適用規格、評価条件

- ・原子力安全基盤機構「平成20年度 照射誘起応力腐食割れ(IASCC)評価技術に関する報告書」
- ・PWR 炉内構造物点検評価ガイドライン[バッフルフォーマボルト](第3版) 一般社団法人 原子力安全推進協会
- ・発電用原子力設備規格 維持規格(JSME S NA1-2012) 日本機械学会

3.2 照射誘起型応力腐食割れの損傷予測評価

- 「平成20年度 照射誘起応力腐食割れ(IASCC)評価技術に関する報告書」に示された評価ガイド(案)および原子力安全推進協会「PWR 炉内構造物点検評価ガイドライン[バッフルフォーマボルト](第3版)」に基づき、評価する。
(詳細は次頁)
- なお、維持規格において、バッフルフォーマボルトは縦列に2本のボルトが残存すればよく、ボルト本数全体の約7割が損傷した場合でも炉心の健全性は確保可能であるとの評価がなされている。
- 維持規格では、バッフルフォーマボルトの仕様等に応じて、IASCCに対する感受性の高い順にプラントをグループ1～4に分類しており、大飯3号炉はこのうちグループ4に属する。
グループ2～4のボルト損傷予測本数が管理損傷ボルト数(全体の2割)※に至るまでの期間は50年とされているが、これはグループ2の損傷予測評価によるものであり、大飯3号炉に対しては、保守的な評価結果と考えられる。

※管理損傷ボルト数:維持規格に規定されている、バッフルフォーマボルト点検時期を決定するための管理基準となる本数。



グループ	ループ数	ボルト本数	シャンク長さ	ボルト材料 ¹⁾	首下形状	シャンク部ベントホールの有無	燃料タイプ
グループ1	2	624	25mm	SUS347	1R	無	14×14 燃料
	2	728	25mm	SUS347	1R	無	14×14 燃料
グループ2	3	1088	35mm	SUS316 ²⁾	2R	無	15×15 燃料
	4	832	64mm	SUS316 ²⁾	2R	無	17×17 燃料
グループ3	2	832	35mm	SUS316 ²⁾	パ'ラボ'リック	無	14×14 燃料
グループ4	3	1080	35mm	SUS316 ²⁾	パ'ラボ'リック	有	17×17 燃料
	4	936	64mm	SUS316 ²⁾	パ'ラボ'リック	有	17×17 燃料
	2	800	35mm	SUS316 ²⁾	パ'ラボ'リック	有	14×14 燃料

大飯3号炉 ←

3. 健全性評価(2/4)

○ 照射誘起型応力腐食割れ(IASCC)評価技術に関する報告書等に基づく評価

「平成20年度 照射誘起型応力腐食割れ(IASCC)評価技術に関する報告書」に示された評価ガイド(案)および、原子力安全推進協会「PWR 炉内構造物点検評価ガイドライン[バッフルフォーマボルト](第3版)」に基づき、以下のとおり評価した。

<評価ガイド(案)に基づく評価方法>

① 運転時間(照射量)によって変動するバッフルフォーマボルトの応力履歴を算出(次頁の図2)。



② 評価ガイド(案)に定められている割れ発生応力線と①で算出したバッフルフォーマボルトの応力履歴を重ね合わせる(図1)。



③ バッフルフォーマボルトの応力履歴が割れ発生応力線を越えた時点(IASCC)の発生時間とする。

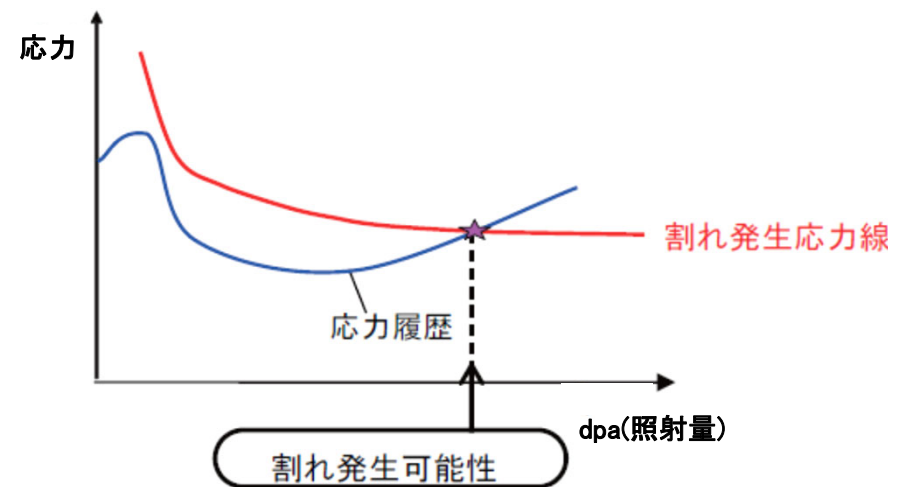
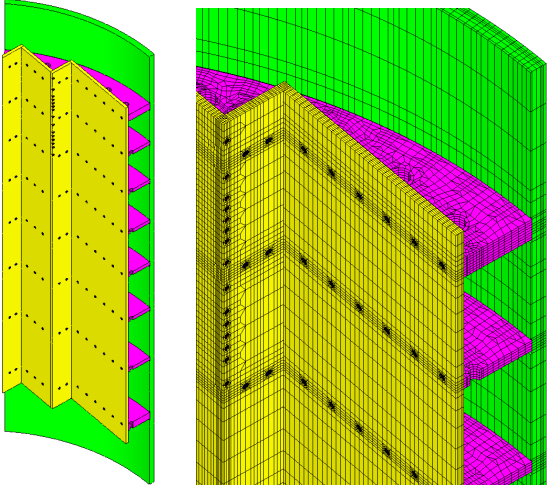
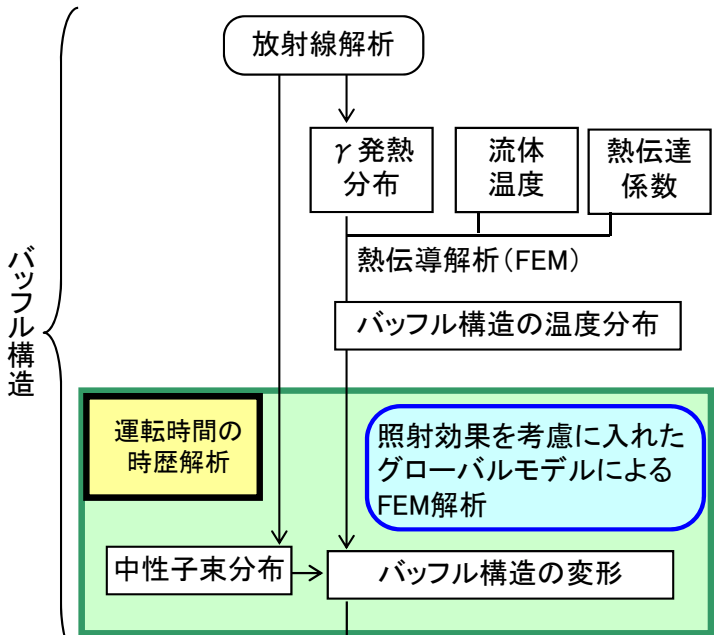


図1 割れ発生予測評価概念図

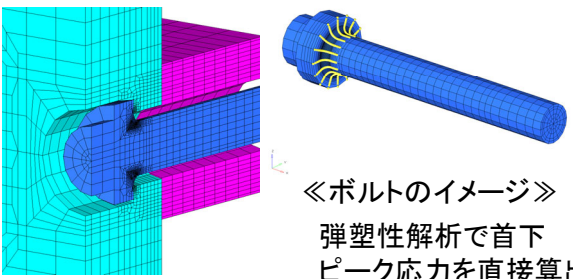
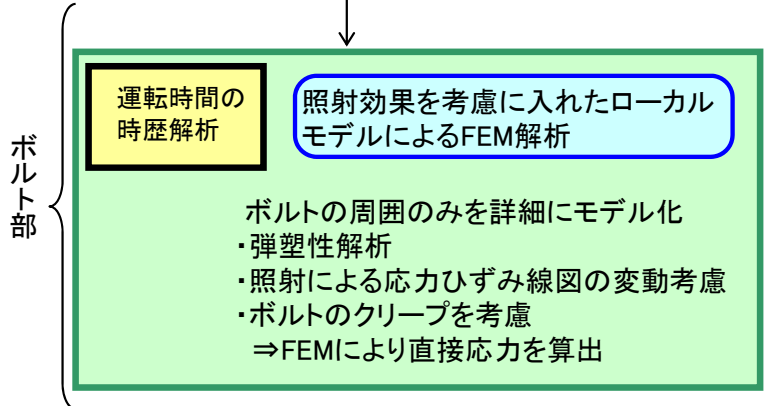
[出典:原子力安全基盤機構「平成20年度 照射誘起
応力腐食割れ(IASCC)評価技術に関する報告書」]

3. 健全性評価(3/4)



《全体図》 《拡大図》
バブル板、フォーム板、炉心それぞれとの接触面に接触条件を考慮

グローバルモデル …ソリッド要素で模擬



《ボルトのイメージ》
弾塑性解析で首下ピーク応力を直接算出

《ローカルモデルのイメージ》
ローカルモデル …ソリッド要素で模擬

*注1 データ受け渡しのイメージ

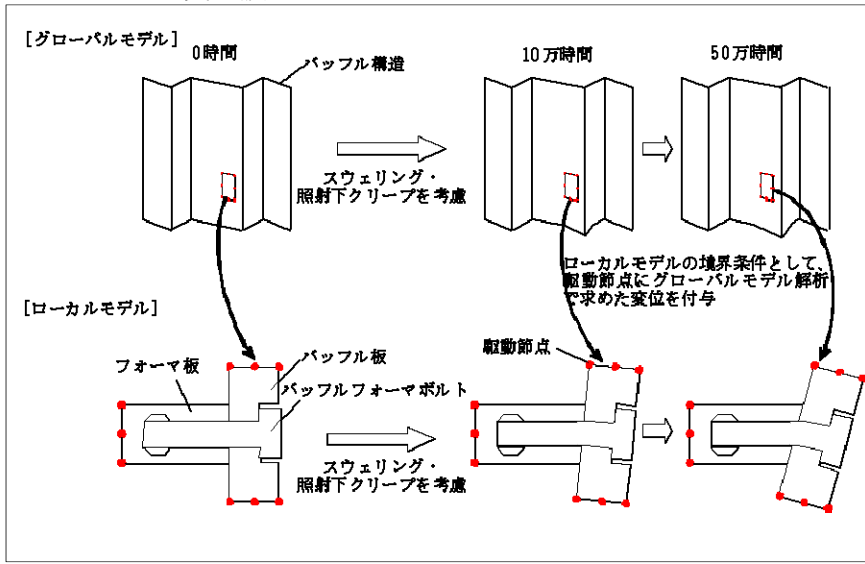


図2 バブルフォームボルトの応力評価手法

3. 健全性評価(4/4)

<照射誘起型応力腐食割れ(IASCC)評価技術に関する報告書等に基づく評価結果>

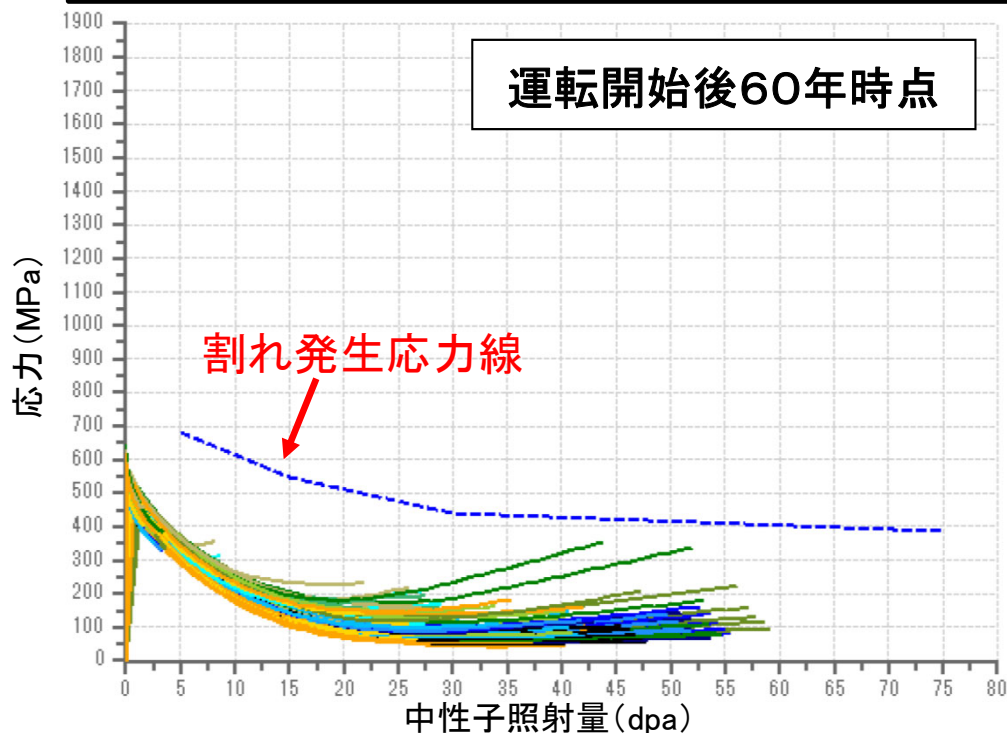
- ・評価の結果、運転開始後60年時点(約42.6万時間(48.6EFPY)※1)までに**バッフルフォーマボルト(全数)※2の応力履歴が割れ発生応力線※3を超えることはなく、IASCC発生の可能性が小さいことを確認した(図3)。**

※1 2010年末までの設備利用率81.5%に対し、今後の設備利用率を90%とする保守的な想定。

※2 炉心の対称性から1/8領域を評価領域とし、1/8領域における全ボルトの評価を実施。

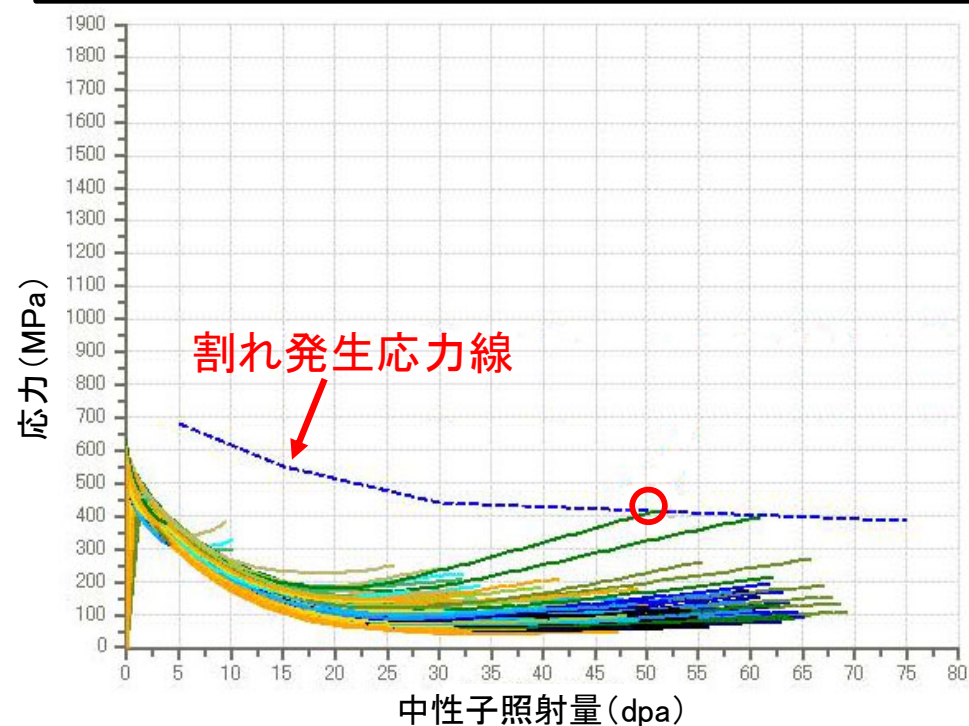
※3 バッフルフォーマボルト材とシングルチューブ材の2種類の割れ発生応力線図のうち、厳しい条件となるシングルチューブ材のものを用いた保守的な評価。

運転開始後60年時点(約42.6万時間)までに割れ発生応力線と交わるボルトはない。



(a) 応力履歴42.6万時間まで

運転時間50万時間までを想定すると、49.6万時間にて割れ発生応力線と交わるボルトがある(○の箇所)。



(b) 応力履歴50万時間まで

図3 バッフルフォーマボルトの応力履歴と割れ発生応力線図の重ね合わせ

4. 現状保全

炉内構造物のステンレス鋼のIASCCについては、維持規格に従い供用期間中検査として水中カメラによる目視検査(VT-3)を実施し、これまで異常が認められたことはない。

5. 総合評価

バッフルフォーマボルトについては、IASCCが発生する可能性は否定できないと考えられる。

ただし、「照射誘起型応力腐食割れ(IASCC)評価技術に関する報告書」で得られた知見を用いて評価した結果、運転開始後60年時点でのボルトの損傷本数は0本となり、バッフルフォーマボルトのIASCCが炉内構造物の構造強度・機能の健全性に影響を与える可能性は小さいと考える。

バッフルフォーマボルト以外の部位については、バッフルフォーマボルトに比べて、中性子照射量、応力、温度の実機条件が相対的に低いレベルであるため、IASCC発生の可能性は小さいと考える。

6. 高経年化への対応

炉内構造物のIASCCについては、高経年化対策の観点から現状保全項目に追加すべき項目はない。